

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
1	10月20日(日) うちぶん	私には不登校の子どもがいたのですが、4月にPEACEサポーター制度が始まり、教室に入れない子どもたちが学べる環境・場所を作ってくくださったことで、そこに通えるようになりました。しかし、サポーターさんがいる時間が2時間と短く、時間帯も毎日異なります。子どもはサポーターさんがいる時間を目指して行きますが、サポーターさんが早番だった場合には、給食を食べる時にもどなたか先生についていただかないといけません。しかし、先生方はとても忙しく難しいとのことで、結局、食べたい給食を我慢してサポーターさんが帰る時間に一緒に帰ることが続いていました。忙しい先生方の代わりに地域の中で、お時間が空いている方や、子どもの世話が出来る方なども一緒になって学べる環境を作っていただけたら、すごく有り難いと思います。	(教育長) お話いただいた登録制度は、学校教育課と社会教育推進課の両方から発信しているかと思います。調整中の制度ですが、学校側も募集をしているということをしっかりとキャッチし、地域にお伝えしなければなりませんね。学校からチラシを配ったり、ミマモルメで配信したりするなど、何より登録をしてくださる方に繋ぐことが大事だと思いますので、校長会などを通じて再周知させていただきます。	
2	10月20日(日) うちぶん	昨年市役所で募集のあった、サポーター制度に登録しました。学校現場で自分ができることを登録するというものですが、登録以降連絡がありません。問い合わせをしたところ、4月以降から始める予定で準備をしており、また連絡しますということでしたが、準備に時間がかかっているのかまだ連絡がありません。先ほどの方のお話はまさに、この登録制度が使えるのではと思っています。あまり周知は進んでいないようですが、必須ではなく、できる範囲で参加するものだそうです。	(市長) 昨年10月の対話集会でも不登校の話が多くあり、安心して学べる環境づくりが大事だということで、本年度の予算を考える上でもそこを大事にしました。先ほどお話に出たPEACEサポーターという、先生では無いのですがこどもたちの心のケアを主に担当してくださる方を各小学校・中学校に一人ずつ配置する形にしています。先ほど仰っていただいたように、サポーターの方が居る時には学校に行けるということもたちも少しずつ増えてきたのは良かったと思います。ありがとうございます。	
3	10月20日(日) うちぶん	日本ではいじめられたこどもが辛い思いをしてばかりですが、海外ではいじめ側の人々が圧倒的に少なく、いじめる側に「あなたの考え方はおかしいんだよ」とカウンセリングをするそうですが、芦屋ではどうなのでしょう。	(教育長) いじめた側のこどもの先々も心配ですので、親御さんや教員、スクールカウンセラーや、スクールソーシャルワーカーといった専門家と一緒に面談し、どういうところでストレスを抱えているのか、自分のした事はどう思っているのかなど、教育とは別の角度から話を引き出し、経過を追いながら対応していくということとはございます。	
4	10月20日(日) うちぶん	中学生の場合、いじめだけではなく、学校や教室に行きづらい要因が多岐に渡っているので大人がキャッチするのはとても難しい状態だと思います。保健室や図書室などで、先生ではない方が話を聞いてくれたり、同じように、今登録してくださっている何も関係のないただの優しいおじちゃん、おばちゃんという存在が寄り添うことが大事なんじゃないかなと思います。不登校のこどもには、そういうきっかけから自分を見つめ直して話すきっかけがあればと思っていますので、お話いただいた制度は本当に良い取組だと思います。地域の方の力はとても大きいと思いますので、こどもの心の成長を促すよいきっかけになればと思います。	(市長・教育長) ありがとうございます。	
5	10月20日(日) うちぶん	私のこどもは中学の3年間全く学校に行けませんでした。そんな中で、担任の先生に受験指導をしてもらうのは辛い状況で、先生に頼れない中、私が学んだのは、良くなるポイントの1つは、親がこどもの本当にやりたい、好きなことを見つけて、とりあえずそれをさせてあげることです。好きなことを伸ばすことで、行きたい学校を必死になって探し、そこに行けるように努力し、高校からは毎日学校に行けるようになりました。ある日突然何を言い出すかもわかりませんが、その1回で何かが起こるかもしれませんが、慎重にこどもは見続けて、ちょっとした変化だとしても、こどもにとっては重大事項かも知れませんが、それが先に関わることもかも知れないので、好きな事を助長してあげることが大事ですね。	(市長・教育長) ありがとうございます。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
6	10月20日(日) うちぶん	社会人になるまで市の事に関わることがありませんでしたが、参加したことで私の知らない世界がいろいろと見えてきました。ありがとうございます。 教育現場の負荷は大きく、先生方が休職されている現実もかなりあります。芦屋であれば、所得水準の高い方も多いですので、そういう方々に現場をサポートしていただく体制が取れれば、対応も多様化すると思います。	(市長・教育長) ありがとうございます。	
7	10月20日(日) うちぶん	文化施設や遺跡などの看板を舗装道路の上に立ててはどうでしょうか。	(市長) 看板については、設置場所にいろいろと課題はあるのですが、文化財を知っていただくのはとても大事なことです、引き続き考えていきたいと思っています。	
8	10月20日(日) うちぶん	交通安全教育の充実が必要だと考えます。小学校高学年、中高生の自転車マナーが悪いのは、交通安全教育が十分でないからだと思います。自転車は加害者になることもあります、被害者になることの方が多いです。小学校低学年や中学年の早期の段階から、交通安全教育を徹底的に行うべきだと思います。単にマナーの問題だけでなく、ルールを知らないことも大きな要因だと感じています。	(教育長) 学校に行き始める小学校1年生の交通安全教育は非常に重要と考えています。5、6月頃からこどもたちが徐々に一人で登下校したり、遊びや習い事に行くこともありますので、この時期に横断歩道の渡り方や歩道の歩き方などの基本的な交通ルールを学ぶ必要があると考えています。どの公立小学校も1年生に対して道路・公園課、警察と連携して交通安全教室を実施しています。 また、自転車に乗り始める時期である4年生においても、自転車の安全な乗り方を学ぶ交通安全教室を全校で行っています。運動場に信号や横断歩道を書いて、車の動きなども含めた交通安全教育を、実際に自転車を使って練習する内容となっています。	運動場を使用する交通安全教室の実施については、学校のカリキュラムに応じて個別に対応しています。
9	10月20日(日) うちぶん	横浜国立大学附属鎌倉小学校では、こどもたち自身が企画や運営に参加することで、学習に主体的に取り組むことができていたそうです。例えば、遠足の行き先や運動会の内容をこどもたちが決めるというものです。交通ルールであっても、警察や消防の方と一緒に企画段階からこどもを巻き込み、学習意欲を高め、生きた知識を身につけさせるのが効果的だと思います。こどもは興味のない内容を一方的に教えられても、なかなか身につけませんし、こどもの主体性を引き出し、実際の体験を通して学習できる機会を設けることが重要だと思います。		
10	10月20日(日) うちぶん	教育に関して、個別最適化を推されていると感じました。公教育の中でのAIやICTにはどのような可能性を感じられていますでしょうか。	(教育長) ICTの学びにおいては、発達段階や個人の特性、学習ペースなどを考慮する必要があると思っています。AIやデジタル技術の活用は、こどもたちにとって新しい相談相手や学習ツールとなりつつありますので、それを活用できるこどもを育てていかなければいけません。また、個別最適な学びでは、その子が何をしたいのか、何を知りたいのかを大事にして、教師が一人ひとりの理解度や課題を把握し、それに合わせた指導をすることが必要です。そういう意味では、ICTの活用により、こどもの学習状況をリアルタイムで把握できるようになり、すごくいいことだと思います。これを活かし、一人ひとりの興味関心や得意分野を大切にしながら、コミュニケーション力やプログラミング、英語など、こどもの可能性を最大限引き出す教育を行うことが重要です。大人になるほど学ばなくなってしまうということは、どこかで意欲を失っているということですので、学びたい、やりたい、夢中になる何かを失わせないよう、こどもが夢中になれるような学びの機会を学校教育の中で提供できればと思っています。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
11	10月20日(日) うちぶん	日本のGDPが低下し、若者人口も減少する中、外国人との共生が不可欠になってきています。これまでの教育は中高大と国内完結型でしたが、これからは世界を意識し、多様性を受け入れる教育が求められます。そういう視点で、国際文化住宅都市として、国際教育はどう考えられていますでしょうか。	(市長) 私がアメリカの大学に行って感じたのは、グローバル人材に求められるのは、その人がどんなものが好きで、どんな事を考えているかというオリジナリティだということです。例えば、英語が上手ではなくても面白い話をしている人と、英語が上手いけれどよく分からない話をしている人がいたら、面白い人の話を聞きますよね。興味関心を引き出した上で学びへの意欲を引き出すということが結局一番大事ではないかと思います。その上で、こどもたちが世界を直に知ることができる環境があることが大事ですので、市長部局としては学生親善使節で2人を海外派遣していますし、コロナ禍で中止になってしまいましたが、もともと教育委員会でも中学生を対象に6人を海外派遣する制度がありました。ただ、中学生がたくさんいる中で6人だけというのは少ないですので、今年からは定員を50人にして、ネイティブの人たちとオンラインで交流を始めています。やはり、公でやるものとしては、できるだけ多くの人にチャンスを作ることが大事だと思っていますので、まずは裾野を広げるという観点で注力をしたいと思っています。	
12	10月20日(日) うちぶん	日本人の学力は、現状でも韓国と比べてもTOEICの点数で100点くらいの差があり、スイスの国際経営開発研究所の調査では日本は67位で最下位と、思っているよりも低いという現状があります。状況の打開のため、例えば国際バカロレアやケンブリッジなどの学習メソッドを検討してはどうかと思います。日本で初めて公立IB校ができるということになれば、海外からの高度人材の流入も期待され、芦屋の国際化も進んでいきます。グローバル人材として活躍していくためには、今後英語力は必須です。マイナー言語の国は英語を母国語もしくは準母国語にしていますが、日本も英語をネイティブにするようなことを1つの課題として考えることも必要ではないかと思います。現在の文科省が定めた学習指導要領で本当にいいのか、市民の皆さんに問いかけ、皆さんの意見を反映するような形で進んでいただければと思います。	(市長) バカロレア式に学校を変えていこうとされている方や、文科省の方とも色々と話したことがあるのですが、私は小中学校というのは「学ぶ」ことに初めて直面する9年間ですので、やはり主体性や自分の興味関心をどう発揮するかという根幹の部分が大事だと思っています。そのために、今まで日本がやってきたやり方でいいのか、新しく我々が目指しているような「ちょうどの学び」という形でやっていくのがいいのか、それとも海外のやっているようなやり方がいいのか、というのを現在の日本の状況を踏まえて、1つだけに絞ってやるという訳ではなく、様々ないい部分を取り入れながら模索していくことが重要だと思いますので、引き続き取り組んでいきたいと思っています。	
13	10月20日(日) うちぶん	先ほど、中学生の海外派遣を6人から50人に増やしたという話がありましたが、対象を大学生まで広げていただくことは考えていませんか。大学生の交換留学にも力を入れていただきたいです。	(市長) 50人に増えているのはオンライン交流ですね。お話に件に関連してですが、現在、国が「トビタテ！留学JAPAN」という、高校生・大学生を最短14日から最長1年まで海外派遣する給付型の海外留学プログラムを行っています。芦屋からも結構海外に行っているようですので、紹介させていただきます。	
14	10月20日(日) うちぶん	インクルーシブ教育について、どのように考えてますでしょうか。芦屋市は障がいや発達問題のあるこどもたちも、通常の学級に取り込む形を取られていると思います。支援の方がついてくださったとしても、ついていけない子は、普通の授業を受けていても分からず座っているだけで、学習は進んでおらず、それは先生のリソースが足りなかったり、教室が空いていなかったりが原因だと思います。芦屋市は30分程で市内を行き来できるほど狭い市域ですので、どこかの学校にまとめてそういう教室を設けるなど、抜本的な改革をしていただきたいと思います。	(教育長) 多様性というのは非常に大事だと思っています。本当に小さいころから一緒に家族のように過ごしていると、障害や特性の有無に隔てなく接することができるように、ある子だけの特別支援だけではなく、どの子にとっても特別な支援というものが個別最適につながるのではと思っています。おそらく今皆さんがいらっしゃるコミュニティの中でも同じ年齢の人は少なく、いろんな年齢、性別、特性をお持ちの方の集まりだと思いますが、そのような環境で小さな頃から一緒に過ごしていくことは、とても大切なことだと思っています。障がい者手帳をお持ちの方には特別支援計画、個別支援計画というものを作成しており、作って終わりではなく、支援担当やコーディネータが保護者の方とお子さんの様子を情報交換しながら、適宜修正しています。一概に対応するのではなく、活動によって個別対応するか、他の皆と一緒にするか、その子に合わせたグラデーションもあると思っています。もしそういった情報共有がされていないのであれば、教育委員会として、特別支援教育センターから支援員や監査チームを派遣しますので、すぐにお声がけください。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
15	10月20日(日) うちぶん	いじめ対策について、調べたことを提案させてください。1つ目は、フィンランドの「KiVaプログラム」という、緑色のベストを着た人が校内を巡回し、いじめの発生を防止したり、いじめを見た人から情報収集を行うもので、早期解決に繋がります。2つ目は、警察の方から全校集会で「いじめはダメ」と話をしてもらうことです。警察からということにより大きなインパクトが期待できます。3つ目は、他自治体の優良事例をベンチマークすることです。いじめ問題対策審議会の方もいろいろとご協議いただいていると思いますが、ネットで調べるだけでもいい事例が多くありますので、是非取り入れていただければと思います。	(市長・教育長) ありがとうございます。	
16	10月20日(日) うちぶん	学校について、給食を持ち帰る人がいますので、やめさせてほしいです。また、雨のときに、サンダルを履くのを認めてほしいです。また、熱中症が増えていますので、シャツをズボンの中に入れないで外に出すのを認めてほしいです。	(市長) 教育委員会の方で、熱中症対策は力を入れてやっています。校則も変わってきており、学校によってはズボンにシャツを入れなくてもよいとしているところもあります。時代も変わってきていますので、今の状況に合わせて変化させていくことが大事だと思います。教育は、変えていくのも時間がかかるし、成果が出るのも時間がかかると思います。なかなか進まないように思われるところもあると思いますが、ちょっとずつ変えていこうと頑張っているところでもありますので、暖かく見守っていただければ嬉しく思いますし、このチャレンジを応援してくださる方がいれば現場の励みにもなります。こういう場でよくお伝えしているのですが、市役所には基本的にお叱りの電話が多く、何か新しいチャレンジをしたとき、例え全体の意見からすれば少数だったとしてもお叱りの声だけしか聞こえてこない、現場としてはやらない方がよかったのかなとなる部分もあります。お褒めのお電話をかけてほしい訳ではありませんが、本日のように、いろいろなポジティブなお声をいただいたことは、職員も聞いてすごく励みになり、勇気をいただいた部分もあります。ぜひ、芦屋市の取組を皆さんに知っていただければと思いますし、周りの方へもお伝えいただければ嬉しく思います。	
17	10月20日(日) うちぶん	スマートボードの導入はされているんでしょうか。板書の時間を減らすという意味で、先生たちの負担も減るかと思います。DXを導入して楽しく学べることを進めていただきたいと思います。モデル校を作るなどして、教育水準を高められたらいいですね。	(教育長) 教室内の環境については、中学校では徐々に黒板ではなくホワイトボード化し、プロジェクターが普通に使える状況になってきています。大事ななのは、ICTがあるかどうかではなく、どう使うかですので、頼るべきところは頼っていきたいと思います。	小学校においては、黒板及び大型テレビを使用しています。
18	10月20日(日) うちぶん	こどもたちが興味を持って勉強するために、とにかく小さい時から本を読んでほしいと思います。こどもは図書館に行くと、自然と自分の興味がある本をピックアップしますし、そういったことが「自分は何をしたいのか」を理解することに繋がると思います。また、国際教育に関連して、もちろん多文化を知ること重要ですが、まず日本文化を知り、日本の歴史を知ることが大切だと思います。	(市長) ご存じない方も多いですが、実は芦屋市には煎茶や華道などの日本文化の家本が結構あるんです。学びというのは、やはり本物に触れることだと思いますので、実際見に行ったり、体験したりすることも大事ですね。私も煎茶の体験をしたのですが、若い子も結構最近来ているみたいなんです。特に秋はルナ・ホールで市民ステージというものをやっけていまして、日本舞踊や民話、お琴など伝統芸能の発表会が行われていますので、そういったものをいかに若い世代に興味を持ってもらえるかが大事だと思います。	
19	10月20日(日) うちぶん	市内ではないですが、私のこどもが通っていた学校では、遠足などの行事の企画を全てグループで話し合って決めていました。グループでコースを決めて先生に提案し、親の許可を取り、現地集合、現地解散です。教科書やパソコンから見るだけでなく、自分たちが興味のあるものを、自分たちで許可を取って、自分たちでミーティングしてという過程がすごく大事だと思います。	(教育長) 自分で考え、自分であるいは自分たちで解決していこうとする力が今まさに求められていると思います。現場とも、校長会や教員の集まりで何度もやりとりをしながら、試行錯誤の繰り返しの中で、こどもたちの意欲を大事にしながら進めて行きたいと思います。ありがとうございます。	

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
1	10月20日(日) オンライン	こどもが通った保育所では、プロジェクト型の活動や、プレゼンなどもしてくださり、こどもの中でその経験がかなり生きているようです。皆で話し合うとか、グループでまとめて発表するとか、「自分の意見を言う」ことを楽しいと思うように育っており、すごくありがたい環境でした。ただ、小学校に入ると、自分の発言というより、やはり先生の話聞いている時間が長く感じるようで、保育所に比べると退屈だと言っています。せっかく「学ぶ」ということを楽しく感じていたので、保育所と学校の連続性があるとありがたいと思います。	(教育長) 縦と横の繋がりのお話が出たと思います。縦が幼児期と小学校の繋がりで、横が公立、私立、こども園との繋がりでですね。縦の繋がりに関して、学校教育は今までと違い、皆が同じことを同じペースでやることは難しく、学校もこの変化に対応しながらスタイルを変える必要があります。特に低学年のこどもたちは、幼稚園から来ていきなり背筋を伸ばさなければいけなくなったり、それまで欲求のままアクティブに遊んでいたところに、評価が入ることで、非常に受け身的になりがちなのかと思っておりまして、この点は仰る通り変えていかなければいけないと思っています。教員たちは、授業中喋り続けるのではなく、できるだけこどもが活動したり、考える時間を増やすということを大事にして取り組んでいるところです。アクティブラーニングというのですが、先生が伝えたいことを言うのではなく、こどもたちに活動を委ねるような方向ヘシフトチェンジを図ろうとしています。この方向性は教育委員会だけでなく、校長会、職員会議などを通じて教員たちにも共有されていますので、うまく各クラスにも届けばと思います。	
2	10月20日(日) オンライン	先ほどのご意見について、私のこどもは認可保育園に行っていたのですが、それはそれで特色があり、すごく丁寧に保育をしてくださっていると感じていました。可能であれば、直営だけではなく、他の認可園とも繋がりがあれば素敵だと思います。	横の繋がりに関しては、例えば「小学校ごっこ」という、園児たちが小学校を訪れる催しでは、こども園や私立の皆さんにもお声掛けさせてもらっています。そこでは、いろんな園の来年1年生になる子たちが小学校と一緒にミニ運動会のようなことをします。また、同じ目線・方向性でこどもたちを育てていくことが重要ですので、大人同士の交流や研修会などもしています。また、校庭開放など小学校の校庭で遊具で遊んでいただくことも可能ですし、こういった連携を深めながら進めていきたいと思っています。	
3	10月20日(日) オンライン	小学校と、幼稚園・保育園の連携があるということはあまり知りませんでした。精道小学校であれば、精道こども園のこどもたちが1週間ごとに小学校に来て給食を一緒に食べる取組があり、すごくいいなと思っていました。逆に言えば、他市の園に行っている場合、小学校との接点がなく不安になると思いますので、どこの園に通っているかなどは関係なく、連携ができるといいと思いました。 関連して、小学校から中学校にあがる時、公立中学の情報も得にくいのではないかと感じています。私立中学であれば、学校説明会が多く、校風や授業内容、進路などの情報を得られますが、公立中学校ではその機会がありません。精道中学校では、4年生の時に中学校との交流会のようなものがあり、歌を歌ったり、校舎見学をしたりしていて、すごくいい取組だと思いました。公立中学校も、積極的に学校の特色や授業内容などをアピールしたり、小学校との交流をしたりしてほしいと思います。そうすれば、中学校の様子も分かり、中学生活も思い描けるようになって、不安も和らぐと思います。	(教育長) 私どもとしても、中学校の広報不足は課題であると認識しています。教育委員会も含め、いろいろ取り組んでいますので、少し紹介させていただきます。1つはオープンスクールです。これはその学校に通う保護者の方だけではなく、地域の方など広くご参加いただけるイベントなのですが、お便りの配布が保護者に限定されてしまっていますので、もう少し幅広く広報できないか考えていきたいと思っています。 1日だけではなく、精道中であれば3週間にわたり、日常の授業の様子や休み時間、そのほかの活動の様子を見ていただけます。学校説明会は開催しているのですが、それだけでは授業の様子などは見えませんので、オープンスクールをもっと広く周知していきたいと思っています。こども同士の交流については、小学生が中学校にソーラン節を踊りに行ったり、合唱を歌いに行ったり、逆に聞かせてもらったりというものがございます。部活動もこれから地域と連携していくという方向が打ち出されようとしていますので、特に小学生の方々と保護者の方々にしっかり説明をしていきたいと思っています。コロナ前であれば、6年生が中学校に行って部活動見学をするということもしておりました。他には、小学校6年生と中学校3年生が英語の時間にオンラインで繋がったりといったこともあります。そういったことも、オープンスクールや入学説明会などでいろいろお話を聞いていただければと思います。	
4	10月20日(日) オンライン	教育長のお話を伺って、公立中学校がとても魅力的に感じました。芦屋市では、公立中学校への進学率は他の地域と比べてどうなのでしょう。もし低いのであれば、なぜこんなに魅力的なのに私立に行ってしまうのでしょうか。単純に疑問に思いました。	(教育長) 公立中学校の生徒数は約1,500人ほどですが、13歳から15歳までの年齢人口は約3,000人と、おおよそ半々の状況です。それぞれの中学校で取り組みは進めていますが、山手中学校などでは、小学校の音楽会の代休日に合わせて「中学校へどうぞ親子で見に来てください」ということを企画したりと積極的に取り組んでいます。山手中や精道中は建て替えも終わりほぼ新築で、びっくりするくらい綺麗ですし、環境づくりにはかなり力を入れていますので、そういった企画のタイミングで実際に見に来ていただき、公立の良さにも触れていただけたらなと思っています。	
5	10月20日(日) オンライン	私のこどもも私立中学校に通っていました。中高一貫で受験が必要ないことと、どんどん先取りで勉強を進められることが理由です。また、こどもが持病を持っていましたので、高校受験の際に出席日数などが足りなくなるのではという不安もあり私立中学校になりました。	(市長) 高校入試のあり方については、県が決めることなのですが、学校現場で授業改善の取組を進める一方で、入試があることで対策に追われてしまうという板挟みになっていると感じており、私からもよく問題提起をしています。こどもが私立がいいと思って行くのであればいいですが、公立に行くのが良くないから私立に行かなければいけないと思われるのは違うと思いますし、公立でも良い学びができるということを教育委員会だけではなく、市を挙げて伝えていきたいと思っています。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
6	10月20日(日) オンライン	私のこどもは3人兄弟なのですが、保育所かどこかの絵本の読み聞かせに行った際に、「兄弟の年齢に幅があるのですが、誰に合わせればいいですか」と相談をしたところ、上の子に合わせてくださいと言われました。同じように、同じ小学校の中でも、教育の基準をどこに合わせていこうとされているのか市長のお考えをお聞きしたいです。	(市長) 具体的なところは教育長からお話ししていただくのがよいと思いますが、市長として昨年の8月に教育大綱という大きなビジョンを作りました。そこでは、「自分と地球の未来を、探究と創造を通じて切り拓く市民」を育てていきたいと謳っています。そのために「ちょうどの学び」を掲げて、それを公立学校の中で実践していきたいとしているのですが、誰に合わせるかというのは、すごく難しいですね。統一試験のない公立学校では、本当にいろんな個性や特性、興味関心を持ったこどもたちがいます。ただ、大人になれば、自分で考えなさいとなるのに、その準備段階である学校では、みんな同じように学ぶことが良しとされている現状は、少しぼくしていけるのではないかとということで、学校の中で取組を進めているところです。 (教育長) ご質問への回答としては、一人ひとりのペース、学び方、到達度、特性、選択に合わせる、ということになりますかね。それが一人ひとりの安心に繋がります。今までの講義型であったり、一斉型でみんなが同じペースで同じ学び方をするのは非常に難しくなっています。時としてそういうところは必要だと思いますが、できるだけこどもたちの、自分の選択・決定に委ねる時間を取ろうという方向性です。みんなかけがえのない1人ですので、かつ学校という環境に来てもらっていますので、そこでこそできる個別最適な学びというものを考えていきたいと思います。いろんな方々とコミュニケーションをとり、対応を繰り返しながら、自分で自分を育てつつ、人の力を借りつつ学ぶことを大事にしていきたいと思っています。	
7	10月20日(日) オンライン	個別のレベルに合わせた学びというのは、講義型というよりタブレットなどを使って、個別のレベルに合わせた授業を進めていくという認識でよろしいのでしょうか。最近では、エリアにはよりますが、外国人の方も増えている印象があります。言葉の理解にも差が出てくる中で、どんな風にレベルに合わせて進めていかれるのが気になるところです。	(教育長) 第一にはその子の現在の状況を把握することが大事だと思っています。そのうえで、取り組む内容によって、その子たちの自己選択と自己決定を促せるよう、教師がこどもに発達段階に応じた選択肢を与え、自分で決めていく力を育むことが大事だと思っています。タブレットは道具なので、必ずしも必要とは思っていません。状況に応じて臨機応変に個別最適な学びを提供したいと思っています。教師側も、毎回リフレクション会議という振り返りの機会があるのですが、そういった場所で、実践の内容を共有しながら進めているところです。	
8	10月20日(日) オンライン	(チャット) 学校に行けていないこどもたちがいることも忘れないでほしいです。こういう交流会でも不登校やいじめについて意見交換してほしいと思います。	(市長) 本日午前中にうちぶんでも対話集会をやってきたのですが、不登校やいじめ、特に不登校の話題が多く出ました。実は、昨年の10月にも「子育て・教育」というテーマで対話集会をしたのですが、そこでは昔不登校だった高校生が参加してくださいました。どうやって周りの人に相談したのかを聞くと、「周りには相談ができなかった」「先生が忙しそうでちょっと相談できないなと思った」という話でした。それを聞いて、この4月から各小中学校にPEACEサポーターというこどもたちの心のケアを担当する人を1人ずつ配置しています。配置している時間は限られているのですが、学校の先生ではない外部の人を派遣することを始めており、実際にそのサポーターに会いに、もともと不登校だった子がちょっとずつ学校に来られるようになったりと、少しずつ変化も出てきています。安心できる学び舎を作るために、引き続きしっかりと取り組んでいきたいと思っています。	
9	10月20日(日) オンライン	私のこどもは発達がゆっくりで、学校以外で、勉強の面をサポートしてもらえる受け皿を探しており、放課後デイサービスを探してみました。ただ、放課後デイサービスでは、軽度知的障がいというか、グレーゾーンの子を受け入れてくれるところはあまり見つかりませんでした。小学校に入ると支援自体がすごく手薄になるイメージがありますし、そういうこどもたちの状況はどうでしょうか。民間の学童であれば勉強のサポートをしてくれるそうで、そちらも考えています。	(教育長) まず学校に入る前に就学前相談というものがあります。ちょうど今ぐらの時期に教育委員会管理課より案内が行くタイミングですね。就学前健診の流れで小学校の校長や教頭と面談ができるようになっていいますので、お気軽にご相談ください。また、福祉センターの中に、特別支援教育センターという機関があり、専門の指導主事と、相談員が2名います。2名のうち1名は観察に行きせていただき、その結果を学校に引き継ぐことができます。また相談員は、発達検査もできます。個別の見立てと、集団の中の見立ての両輪からご相談いただくことができます。学習のサポートのところていくと、ソーシャルスキルトレーニングというものがあるのですが、小学校に入れば支援員が付きますので、場合によっては、支援員さんと状況に合わせてトレーニングを進めるような形になります。まず、学校の就学前健診のときにご相談いただくこと、そして特別支援教育センターにご相談いただくことの2点をしていただいたらと思います。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
10	10月20日(日) オンライン	(チャット) 先生方の授業の工夫が残念ながらあまり伝わってきていないように思います。 研修とリフレクションのレポートなども、個人情報に配慮した形で一部情報発信していただけると大変参考になります。	(市長) チャットに私から2件リンクを送りました。どんな取組をしているのかというところだと、実は教育委員会の方で頑張って発信をしています。1つ目のリンクの中で、取組について発信をしていますのでぜひご覧いただければと思います。2つ目は実際にどんなことをやっているのか、もう少し大きな話が掲載されていますので、併せてご覧いただければと思います。 ●探究的な学び研究推進チーム【ONE STEPpers】の取り組みについて https://www.city.ashiya.lg.jp/gakkoukyouiku/gakkou/onesteppers.html ●PEACEプロジェクトについて https://www.city.ashiya.lg.jp/gakkoukyouiku/ashiyapeaceproject.html	
11	10月20日(日) オンライン	(チャット) 地域と学校の協働体制について、現在どれほど進んでいるのか、簡単にご説明いただけたらと思います。	(市長) 地域と学校の協働体制については、今日の資料2つ目の、教育長の資料2というところに掲載していますので、ご確認くださいと思います。	
12	10月20日(日) オンライン	外国人のこどもについて、言葉や勉強に困ったりするとき、内輪でこのお母さんだったら英語できるよとか、このお母さんだったらフランス語は長けているよといった風に、国際結婚したコミュニティーの中で、ボランティアで助け合ったりしているんですね。芦屋であれば国際感覚もあると思いますので、例えばこういうことができますとか、こういう知識がありますというのを登録して、お互いにサポートするような仕組みがあればいいんじゃないかと思います。それがそんなに効果が出なくても、親としてはちょっと助けてもらえるだけでも気持ちが楽だし、同じようなお母さん同士で意見交換や情報交換ができれば、市役所が全部頑張らなくても、情報を持っている方を、うまく橋渡しするようにするアイデアが出せたらいいんじゃないかなと思っています。	(市長) これまで学校でも、いわゆる地域ボランティアのように学校の中に地域の方がボランティアで入っていただくことをしているのですが、その拡張版のようなイメージですね。やはり学校というフィールドだけではなく、それこそファミリーサポート制度というものなどいろいろあるんですが、その辺りの発信も含めて、引き続き考えてみたいと思います。	

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
1	10月23日(水) 福祉センター	ハード面でこどもたちが主体的に学べる環境をつくるという話をすごく興味深く聞かせていただきました。実際に、そういう環境にこどもたち置くと、マインドなども変わっていくもののでしょうか。	(教育長) 他者受容感といいますか、人に受け入れられる、認めてもらえるという体験は大事だと思っています。認めてもらえるから、安心して失敗や間違いができ、それが積み重なり挑戦することができる。いきなり挑戦できるわけではなく、まずは認めてもらい、次第にどういう学び方がいいか、どういうペースがいいか、どの場所がいいかなどを選択するようになり、決定をする。この自己選択と自己決定が他者受容感とリンクしているわけです。そうして初めて自ら学ぶように育つのかなと思います。学びながら遅く育っていくようなイメージですね。「それでいいんだよ、そのまま進んでいい」ということを繰り返して言うてもらえる環境がすごく大事だと思います。	
2	10月23日(水) 福祉センター	環境の話がありましたが、こどもたちが選べる環境というのは少ないと思っています。先日こどもが「学校というのは、行きたくなければ来なくてもいいんだよ」言われて帰ってきたのですが、小学生の場合、家か学校か、もしくは習い事が近くの公民館しか行く場所がありません。「来なくていいよ」と言われたら、じゃあ何処に行ったらいいんでしょうか。そういう居場所についての情報が増えたらいいなと切実に思っています。	(市長) 昨年10月の「子育て・教育」の対話集会でも、学校に行きづらさを抱えているこどもたちについて、多くの声をお聞きました。実際に、学校に行きづらかった高校生の方も参加してくれて、話をしてくれたこともあったのですが、まずはこういう場で、決して言いやすい話ではないと思いますが、共有していただき感謝申し上げます。 (教育長) 担任の先生が様々な対応策を提供できることが大事だと思いますが、授業中に相談するのも難しいですよ。その場合、管理職はもちろん、養護教諭にご相談いただいても結構です。また、市で配置しているPEACEサポーターという、各学校で教室に入りにくいお子さんをケアする者もいますので、そちらに相談いただくのも1つの案としてございます。学校の敷居自体が高い場合には、うちぶんに「のびのび学級」というものがあり、今回リニューアルされて過ごしやすい空間になったと思うのですが、そこには専門の臨床心理士がおります。その専門医は、各学校のPEACEサポーターの様子を見に行ったりもしていますので、そういう意味でも専門家に現状をお伝えいただくのもよいかと思います。また、教育委員会の学校支援課には、常勤でスクールソーシャルワーカーという、福祉と繋がっている専門家もおりまして、場合によっては福祉の機関と繋ぐことも可能です。 授業の方向性については、一気に全てを変えていくのは難しいですが、それぞれの学年で、どの教科ならできるかをできる範囲からこどもに委ねていき、その先で他の教科に広がっていけばいいと思っています。1つの教科をきっかけに学び方を身に付けて、教員もこどもたちと一緒に応用していくイメージです。教員数の話もありましたが、こういう学びを学年全体でやるときは、担任以外にも追加で1、2人が付きます。学びの後には振り返りを大事にしており、決してやりっ放しにするというわけではありません。その日の、その子の学びや到達度がどうだったのかを把握し、基本的には学級単位ではなく、学年全体で次にどの子と関わるかを進めていくことになります。最近になって自己調整学習とか、自由進度学習という言葉も出てきているのですが、今後の学習指導要領の改定では、そういう方向性も示されると聞いています。	
3	10月23日(水) 福祉センター	こどもが学校に行きたくない時、親としてはやはり学校に行ってほしいと思っていましたが、長い目で見れば、学校だけではないと考えつきました。しかし、そこでどうすればいいのかが分かりません。とにかくまずはどこに相談すればいいのかがもう少し明確になればと思います。また、最近の授業では座って学ぶものから、立って会話しながら学ぶものも増えているようですが、それは特別な授業だからなのか、それとも今後算数や国語などでもそういうスタイルになっていくのかを教えていただきたいです。		
4	10月23日(水) 福祉センター	教員をしていますが、生徒各自に学ばせるというのは良いんですけども、一斉授業ではなく一人ひとりが別々の課題をしていれば、教員1人で見られるものではなく、感覚としては、10人に1人ぐらいしか見られないですけども、そういう授業に対して会話はあるんでしょうか。		

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
5	10月23日(水) 福祉センター	学校支援ボランティアのコーディネーターをしているのですが、こども家庭・保健センターとコラボして、夏頃から日曜日に特に中高生に特化したこどもたちの居場所づくりの活動をしています。やはり学校に行けない子は、勉強も遅れがちになってしまい更に不安に思いがちですので、学習支援のボランティアも併せてやっています。まだあまり周知ができていないので来てくれる子は少ないですが、1人、2人と来てくれて、そういったこともしているのを皆さんにも知っていただけると嬉しいです。同時に、そういうこどもたちが何処に行ったらいいのか、親御さんがどこに行かせてあげたらいいのか分からないという話も聞きますので、こども家庭・保健センターの方に市内のそういう居場所をピックアップして冊子にして、それをこどもたちに届けてほしいというお願いもしています。やはり合う合わないがありますし、日曜日はここに行ける、平日には行ける、というのが一目で分かるといいですね。	(市長) このこども家庭・保健センターは今年度から日曜日も開館しているのですが、これまで日曜日に開けていなかったところを開けようとしたのは、中高生の居場所を作りたいという思いからです。中高生からよく言われていたのが、こどもの居場所はあっても、小学生を対象にしたものが多く、中高生はなかなか行きづらいということです。そこで、こども家庭・保健センターであれば自習室やミュージックスタジオもありますし、中高生も集まりやすいということで、この場所を日曜日に開けることになりました。	
6	10月23日(水) 福祉センター	精道中学校では、対象は精道中学校の生徒だけではなくありますが、試験の前にボランティアで、放課後に勉強会を開き、学習支援をしています。精道中学校に来られる方がいらっしゃったらぜひお越しください。	(教育長) 学校支援ボランティアの発信については、社会教育推進課と学校教育課から主にしていますが、ホームページに掲載する程度にとどまってしまっているので、今後はInstagramや学校のホームページ、学校からのメール配信なども検討していきたいと思っています。過去に自身のこどもが学校へ行きづらかった経験のある親御さんの話が、今問題に直面しているこどもやその親御さんに響くということもありますし、居場所や、ボランティアをされたい方もたくさんいらっしゃいます。この点については前回の対話集会でもお話がありましたので、しっかり広報していきたいと思っています。	
7	10月23日(水) 福祉センター	今はしていないのですが、学習支援のボランティアをしたことがあります。その時にはこどもの数に対してボランティアの数が非常に少ないと思いました。ここに来られている方々はきっとパワーがある方だと思いますので、これを機に皆さんにも協力いただいたり、周知の面でも、自治会の掲示板に貼るとか、もっと縦や横の繋がりで広めていった方がいいと思います。また、市役所などでよくティッシュのサイズの婦人相談窓口の案内のようなものがありますが、そういうのも気になる方は絶対手にとられると思いますので、やはり広報の仕方が大事じゃないかと思います。私たちのようなもっと手伝いたい、こどもたちの手も離れて時間があるけれどどうしたらいいんだろう、と思っている人には、第一歩のハードルがすごく高いと思いますのでただの「ボランティアを募集してます」という広報を超えて広めていけるような形があればいいですね。個人情報もありますし、誰もが参加できるわけではないので難しいところもあると思いますが、こども家庭・保健センターのような公共の場所を使わせてもらえとなれば、校区や学年を超えて、みんなが参加できるのではないかと思います。		

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
8	10月23日(水) 福祉センター	私のこどもは、学校は大好きであると同時に大嫌いでもあるんです。なぜかという、5時間目まではいいですが、6時間目になると、なぜそんなに長く学校に居ないといけないのかという気持ちになるんだそうです。給食や友達は好きなんです、勉強は嫌いで、なぜ勉強しないといけないのかという疑問がありました。そのことを小学校の先生に相談した時に、「なぜ学びが必要か、私たちがこどもたちにお話してできないところに罪悪感を感じます」というお話を聞きました。その先生自体は勉強が嫌いだったそうなのですが、ある時期に必要なと分かったとも仰っていました。そういう話をこどもたちにしてくれればいいんですけどね。また別の機会で中学生と話した際、大人の話聞くのがすごく楽しいと話していました。自分はまだ中学生で経験は無いけれど、大人の仕事の話とかを聞くと世界が広がると言います。先日のEducation Dayでは、すごくたくさんの方が教育について一生懸命にディスカッションされていました。芦屋には熱心な方がたくさんいます。そういった方たちの体験談はこどもたちもすごく興味があると思いますし、そこからその職業に就くにはどんな学びが必要なのかと興味を持ち、自らの力で学びの必要性を見出すこともできる機会になると思いますので、そういう授業もあっていいんじゃないでしょうか。大人の体験を話すことで、こどもたちも大人との境界線がなくなるというか、大人もそんなことを考えていたんだというような距離感がなくなって良いのではないかと思います。	(教育長) 教育活動の時間について、私立学校では7時間目や土曜授業があったりしますが、こどもが詰め込み過ぎということは国も重く受け止めており、社会的に余白が必要だといわれています。教育課程の見直しも進められており、文科省の指定する研究開発校では、45分授業を40分にしたり、50分授業を45分にすることも行われています。もともと集中力は約20分が限界ということですので、効率化を図る意味でも、今後の教育課程の見直しを見越した上で、時間割を考えていかねばなりません。私としては、仮に5時間目で終われたとして、その後もう1つ塾に行ってしまうのではなく、先ほどサードプレイスの話もありましたが、できればいろんな場所で、こどもたちが生き生きと活動する時間、外に遊びに行ったり、好きなことに打ち込むような時間を作ってあげたいと思っています。	
9	10月23日(水) 福祉センター	先ほどのお話に関連して、私は高校で探求に特化した特色クラスに入っているのですが、そこでは大学の先生や企業の方の講義を入れるシステムがあります。大人でもこういうことを考えるんだと思ったり、講義の後に質問に行ける時間もあります。そういう授業や時間の中で、夢に近い職業の方々と繋がりができることをクラスの皆はすごく有り難いと思っていますし、そこが大切なんだと思います。小中学生の時は、先生との繋がりは本当に授業だけで、ただ勉強を教えてくれる人というイメージでしたが、高校の先生方は大学受験でこんなふうに失敗しちゃってとか、今こどもがいてとか、プライベートも含めた話を授業内で沢山話してくださるので、担任の先生と仲良くなれて小中学生の時にはなかった信頼関係を築けています。自分のお話をしてくれる先生というのはとても大切だなと思います。	(教育長) 先日、Education Dayで中室牧子先生に来ていただいたのですが、「良い先生と出会うというのは、人生が変わる」と仰っていました。それは別に学力のことを言っている訳ではなく、こどもたちの人生を左右するのは、先生の人となりということです。先生の生き様そのものが、語られて繋がっていく。特にこどもたちは失敗談を聞きたいはずなので、人間らしく失敗をたくさんしたということを、先生側も努めて話していかないとはいけません。先生たちは教科の研修をしていますが、人となりの研修もすごく大事だと思っています。自分はスーパーマンではなく、先ほどの話にもあったように、企業や自営業の方、いろんな職業の方がいらっしゃいますので、そんな方々と繋がれる場があると非常にいいと思います。前で喋って伝えるだけでなく、膝を突き合わせて対応するような授業も組み入れていきたいですね。そしてできればそこに地域の方や保護者の方がいらっしゃると、よりこどもたちにとっても安心した地域になると思います。	
10	10月23日(水) 福祉センター	学校というのは、授業時間や科目、関わる人たちも選べない「限られた場」であると思います。私はスクールカウンセラーをしているのですが、こどもたちからよく聞かれるのは、法的に設けられている指導教室や教育相談などの相談場所は、最終的に学校に行きつくのが見え見えて、とても第一歩が重いそうです。学校が嫌いだったり、学校になじまない気質を持ったこどもたちにも、学校という場に限らずサードプレイス的に居場所があり、学習できたり、他人と関わられたりする場所ができればいいと思います。フリースクールや、オルタナティブスクール、最近流行りのモンテッソーリ教育などは、まだまだ日本はこれからということだと思うので、充実すればいいなと思います。また、カウンセラーの仕事で思うのは、発達面で診断は下りていて受給書をもらえる方は福祉の対象にはなりますが、そこには至らないグレーゾーンのこどもたちの居場所を作るには、公的な機関や公教育ではどうしても人手不足があるということです。そういうこどもたちに日々丁寧に関わられている先生方を見るたびに、もう少し人手が増えればいいと感じています。また、市長が掲げている「ちょうどの学び」について、ヴィゴツキーの最近接領域という考え方が心理学にはありますが、それを実現するにはこども一人ひとりをアセスメントし、学力だけではなく総合的な力を評価する必要があると思います。とても大切なことだと思うのですが、どのようにされるのかを教えてくださいたいと思います。	(教育長) オルタナティブとかサードプレイスに近いのものが、校内のサポートルームやのびのび学級です。教師としては、たとえ短い時間でも学校には来てほしいのが本音ですが、それが出すぎても、こどもたちは引いてしまい、匙加減が非常に難しく思います。そういう意味で大事にしているのが「マイプラン」というもので、そのこどもが来た時に何をどこまでするかを決めておくという活動をしています。自分でコントロールしていく力を身に着けることを目指すものですが、もちろんくじけてできない時もあります。朝から学校に行くのは難しかったり、食欲がなくてお昼からエンジンがかかる子もいたり、いろんな特性を持った子がいますが、その子に「応じる」というのが大事だと思いますので、まずはその子がどこまでやるかを決めていくという形です。そういった場所を認めていく方向性も打ち出されており、私たちも研究の余地はあると感じています。ヴィゴツキーの話は、1人で到達できる課題の範囲と、人の力を借りて到達する範囲があるというものですが、「ちょうどの学び」というのは、「楽ちんでちょうどいい」の「ちょうど」ではなく、ちょっと難しいところに梯子がかかっている、その梯子を上るには人の力を借りて、学び合わないとは到達できない範囲にあると考えています。そのための課題や、目標の設定も学びに繋がっていると思いますし、周りの大人やお友だちに頼って、頼られての信頼・協働関係が最終的に安心感に繋がるのではないかと考えています。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
11	10月23日(水) 福祉センター	教育や学びを考えた時に、どうしても中心は学校になりがちですが、皆さんのお話を伺って、家と学校と塾だけという今までのあり方を見直す時期だと感じました。一方で、全てを学校以外でとなると、私教育にお金を投じられるかどうかで家庭間の格差が生じてしまいますので、やはり学校も大事な場です。学校に頼りすぎず、学校もある種の学びの1つの選択肢と捉えるような心持ちがいいと思いました。	(市長・教育長) ありがとうございます。	
12	10月23日(水) 福祉センター	芦屋は国際文化住宅都市ですが、最近テレビなどを見ますと、よくストリートピアノや駅などでピアノをあちこちに設置されており、旅行先などでもよく見かけます。しかし、芦屋市でそういった話を聞いたことがありません。このことも家庭・保健センターや図書館、芦屋病院などにもピアノがあると思いますが、ほとんど活用されていません。上手い下手は別として、気軽にピアノが弾ける場所があれば、芦屋の文化度を高められるのではと常々思っています。市に要望書を提出したこともあります。設置する場所や維持管理のことを踏まえると、現時点ではピアノを設置することができないとのことでした。また、JRの駅員さんに聞いたこともあるのですが狭くて無理とのことでした。設置している他市のことについてもっと確かめて、検討してほしいです。国際文化住宅都市の芦屋にストリートピアノが無いのは恥なのではないかと思っています。是非とも設置をお願いいたします。市長さんはどのようにお考えなのでしょうか。	(市長) こども家庭・保健センターのピアノを弾いた方はいらっしゃいますか。おひとりいらっしゃいますね。芦屋だと本当にピアノが上手い人も居ますので、少し触れにくいように思われる方もいるかもしれませんがね。図書館とか、芦屋病院などもそうですが、ひとりしか弾いたことがないというのは、少し悲しい気もします。まずは、今有るものをどうやってみんなに、気軽に触れていただけるかということは考えていきたいと思ひましたし、駅などに置いてあるピアノは市ではなく鉄道会社が置いていたりしますので、そういうところも考えていければと思います。	保健福祉センターでは年に5回エントランスコンサートを実施しており、ピアニスト等をお招きしてピアノを活用しているところではありますが、いずれの施設においても、ストリートピアノとして自由に音を出すということになると、施設の本来的な使用に支障が出てしまうことから、現状としてはストリートピアノとしての運用が難しい状況でございます。

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
1	10月31日(木) 上宮川文化センター	市長が「ちょうどの学び」を掲げていらっしゃるの、すごく納得しているのですが、実際に現場では実現されていないと感じています。私はほぼ毎日、こどもたちや授業を見ているのですが、個性や特性のある子ひとり一人に合った教育というのは、なかなか実現は難しいだろうなということを感じます。インクルーシブ教育はメリットもあると思いますが、一方で取りこぼしが出てくるという懸念もあります。学校に行きたいけど、その環境に入れないこどもは多いのではないかと感じていまして、私の周りでも他市に引っ越したり、学校以外の場を選ぶという声も聞きます。インクルーシブ教育をするのであれば、本当に一人ひとりを見る必要があると思いますが、学校によってムラがあったり、教師の方によって考え方が違ったりで、同じ学校でも対応が全く違うことも大いに有り得ると思います。先生方も一生懸命やられていますが、やはり一人ひとりを見る余裕はないですし、特性について勉強したり、専門的にどういう対応をしていくのかなどを学ぶ時間もないのではと感じます。ですので、例えば学年に一人ずつサポートを増やすことなど、インクルーシブ教育をするのであれば、そういったことも考えていく必要があると感じます。	(教育長) 市長の言う「ちょうどの学び」の「ちょうど」とはどういうものなのか、学校の方もしっかり捉えていかなければなりません。「特別支援」という言葉がありますが、世間で言う特別支援教育とは障がいのある子たちだけの教育という意味合いですが、私たちはどの子も特別な存在であり、一人ひとりに合った個別最適な教育が大切で、一人ひとりが今どういう位置にいて、どういうことが苦手かなどをアセスメントして、しっかり把握してアプローチをしたいと思います。当然、教えるということも必要になりますが、できるだけこどもたちに委ねることを大事にしてほしいという話をしています。環境の話がありましたが、教室や校舎の環境整備はすごく大事だと思っています。理想としては国が高校も含め校舎を全面的に変えて欲しいくらいです。例えば入口すぐが図書館になっていて、畳や絨毯が敷かれていて、行きづらい子もまずそこで休憩したらいいよという環境があっても良いと思っていますし、少しユニークな形で入口にストリートピアノを置いていたり、カフェのような雰囲気になっている学校もあります。心をまず開放できるような安心感が大事なのではないかと思います。校舎はだいたい80年設計らしいので、今すぐリフォームは難しいですが、中の空間での工夫はできますし、机を丸くしてみたりとか、コンクリート貼りのところに木製のものを置いてみたり、という工夫は投げかけています。できれば、今進めているこどもたちの選べる学びの延長線上で、こどもたち自身がそのリフォームをつくり上げていければ、そういう教室には皆来たくるのではないのでしょうか。学校の中で、こどもたちが安心して失敗し、安心して挑戦できる環境を整備できればと考えています。	
2	10月31日(木) 上宮川文化センター	小学校の中に対話スペースがありますが、狭くて使い勝手も悪く感じており、フリーアドレス式の自習室のような場所があればいいのではと考えています。入るのは自由で、1～2人先生が常駐しており、声をかけたり、勉強をきいたりできるようなものだといいですね。適度な開放感で机と椅子があり、特性に応じた教材やトレーニングの本や紙とクレヨンと紙が置いてあったり、その日取り組めるものをなんとなくやることができ、1時間行ってまた帰ってくるということも可能な中間のエリアが学校内にあると良いと思います。また、仕事を調整しながら、学校に付き添ったりと既に相当頑張っている保護者も多いですが、学校に来たら親は帰るか、あるいは付きっきりでいてくださいという2択ですと、こどもたちの状態も変化する中、「ちょうど」にはならない気がしています。保護者の同伴も可能で、途中での退室も可能といったように、柔軟な対応ができるといいですね。	(市長) 人員不足の問題について、市長部局と教育委員会は別組織ですので、私からあまり事業の中身のことは触れませんが、教育委員会の予算については市長部局が持っていますのでその観点から言うと、今年度から予算をつけて、支援員さんや介助員さんの人数をそれなりに増やしています。支援が必要なこどもたち全員に、一日中ずっと横についていられるかという、まだそういう状況ではありませんが、その部分の人数は増やしていこうと取り組んでいる途中であることだけお伝えできればと思います。	
3	10月31日(木) 上宮川文化センター	小学校の先生方の負担が大きいことに驚いています。いろんな事情で授業に参加できないお子さんも昔に比べて多いです、国際化に伴って言葉の問題もありますし、先生方が取り組むべき課題も細分化しすぎて、先生方は本当に大変で、人手が足りていないと思います。本来、先生方が集中したい事に集中して取り組めていないように感じますし、従来の体制ではいけないのでしょうね。先生方は本当に良くやって下さっていると思うのですが、こどもたちがのびのび活動できているという状況では無いと感じています。		

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
4	10月31日(木) 上宮川文化センター	芦屋市には通級指導教室がほとんどなく、通級を必要とすることもたちにとって大きな課題となっています。通級指導教室は、ガヤガヤした環境では集中できない子や対人関係の学習が必要な子など、個別の支援が必要な子どもたちにとって重要な場所で、やはり人員が必要だと思います。他市の事例では、自分のこどもに通級が必要そうであれば、就学前から見学に行くことができ、事前に先生と関わるができるそうです。そういった前倒しのサポートは、繊細な子どもたちにはすごく大きいと感じており、学校生活への不安感も和らぐ効果があると思います。予算の問題などもあるかと思いますが、芦屋市では通級指導教室や人員が不足しており、改善が進んでいません。また、一人ひとりの能力に合った教育という話もありましたが、支援が必要な子、逆に賢すぎて一般的な授業が辛いなど、いろいろな飛び出方があると思います。画一的にいうのも難しいです。宿題は最低限でいいのではと個人的には思います。やりたい子はやって、辛い子はやらなくてもいい、そのぐらいでいいです。やるべきことが多いと感じていまして、無駄に親子喧嘩も増えてしまったりします。教育の目的は、やはり幸せに生きる道を探すことであったり、自己肯定感を育むことであってほしいと思います。私のこどもが、テストで80点だったのですが、「僕はアホや」と言って帰ってきました。聞けば、丸がなくダメな所だけが赤で書いてあって、そこに目が行ってしまったようです。それも、答えは全部合っているのに、「＝」が抜けていることで減点されていたり、そういうものに意味があるのかなと思ってしまいます。親としては、そういう小さなことでこどもの自己肯定感を育てられたり、もしくは潰されたりということもあるのではと思うので、画一的な宿題や数値で順位を付けるテストなどが本当に必要なかと日々感じています。	(市長) 本日、具体的な話は出ていませんが、芦屋市の中学校では約８％が不登校と、１クラスに２、３人不登校の生徒がいるという状況です。我々としては、皆が学校に来るべきだとは思っていませんが、学校が最大の受け皿であることは間違いありませんので、学校の環境を良くすることと、他の受け皿をつくることの両方やらないといけないと思っています。その間にある部分として「PEACEサポーター」という、こどもたちの心のケアを専門に担当する方を全ての学校に１人配置しています。まだ一日中いてくださる訳ではないですが、これは実は去年の対話集会で学校の先生に相談できなかったという声を聞き、学校の先生でない方に入っていただいて、こどもの心のケアを進めています。先生ではない人を受け入れて、その人に心のケアを担当してもらうということで、今始めているところです。 (教育長) 通級指導というのは主に発達障がいをお持ちのお子さんを対象にした教室ですが、通級を希望するお子さん13人につき1人の先生が加配されるようになっています。国の予算3分の1、県の予算3分の2で、だいたい2、3校に1人通級指導の教員が付いています。13人に1人というのは国の決まりですが、通級指導が必要なお子さんは増加傾向にありますので、県内で増えれば県の加配が付くこともあります。その際、いわゆる通級教室の用意がなくても、サポートルームあるいは事務室の一部を囲って、教員免許を持っている方に支援員として付いていただき、個別で対応する時間を週1時間から2時間程度設けています。仰る通り人が増えた方がいいというところで、人員も増やしている状況です。例えば支援が必要な子どもたちは、8時半から9時半ぐらいに登校してくることが多いですが、授業をしているとなかなかそこに先生が迎えに行くことは難しいです。そういった場合に、PEACEサポーターに出迎えをしていただいています。そして、給食の時間や、体育や音楽、図工などその子の興味のある授業から合流していく形で、それまでの繋ぎをPEACEサポーターの方に担っていただいています。PEACEサポーターがいることで、昨年まで学校に来られなかったこどもが、「あの人がいるから行く」と話しているとあちこちの学校で聞くようになっており、このまま引き続きお願いしたいということで話をしているところです。 宿題について、究極の「ちょうどの学び」となると、一人ひとりに応じた宿題を作る必要があると思います。宿題の有無ではなく、宿題の形を変え、続きがやりたくなるようなものにするのが本来あるべき姿かと思っています。そこにたどり着くのはなかなか苦しいですし、お子さんによっては楽な方に逃げてしまうケースもあると思いますが、そこはできれば授業で基礎的な学習の中で定着させ、その延長線上で個別にカウンセリングできればいいですね。これにはもう少し時間が必要と思っていますので、まず授業の転換から取り組んでいるところです。	
5	10月31日(木) 上宮川文化センター	芦屋の保護者の方は教育熱心な方が多いので、塾に通っていないこどもは付いていくのがすごく大変だというイメージがあります。こどもの学年からは、神戸高校や御影高校、県立芦屋高校にも多数進学しており、学年でレベルが高く、私のこどもはなかなか評定平均が取れず、私立高校に進学することになりました。その私立高校の説明会では、オール3の成績では専願でないと難しいと言われていたのですが、私のこどもはオール3で上のクラスに通りました。芦屋市の教育はオール3でも、他市からすると4以上の学力があるのではないかと思います。もし、神戸市に住んでいたら、行きたい公立高校に通うことができた可能性もあります。現在、教育に力を入れて取り組んでおられますが、一人ひとりの学力に合わせて対応できなければ、高校受験の際に困るのではないかと感じています。	(教育長) 成績のつけ方を変えるためには、入試制度が変わらないといけません。実際に、定期テストが内申点に響き、内申点が入試に響き、なるべく上の高校・大学に行くという流れを崩している自治体も存在しています。自己表現といいまして、自分がこれまで何を頑張ってきたか、これからどんなことをやりたいという表現をするような公立高校入試があるようですが、だんだんと個別に合ったスタイルでの自己表現が認められていくようになれば良いと思います。国のカリキュラムを消化しながら、どうやって学びをこどもたちに委ねていくか。委ねた学びが、どんな風に定着し、こどもたちの力になっているかを評価するという見方もできるのではないかと思います。そういう意味では、テストの中身が大事だと思っていまして、現在「ちょうどの学び」を進めながら取り組んでいるところです。究極的には、その時々言葉がけそのものが評価だと思っていますので、その積み重ねが、成績や試験に繋がるよう変わっていくといいと思います。	

当日の主なやりとり				備考 (補足説明など)
		市民の発言	市長・教育長の発言	
6	10月31日(木) 上宮川文化センター		(教育長) 皆さんのお話を聞いて思いましたが、こうした形の対話を学校ともしていただきたいということです。いろんな話を保護者の方と一緒にあって対話をしてほしいという話は、校長会や教頭会でもお話し、学年やクラス担当に話もおりていると思いますので、まず今のような話を出していただきたい。これまで教員といえば、自分の経験による固定観念をもとに指導していましたが、こどもにもっと委ね、寄り添うという考え方に学校もだんだんと変わってきています。私が小学生の頃ですと、クラスに何人いても先生が前でチョークを持って喋る形でしたが、そういった受け身の授業から、こどもの自発性を誘っていこうという考え方になっています。こどもたちの特性に応じた選択を誘うといえますか、どこならできそうだとか、どこまでなら行けるかといって選択する時間を、ちょっと1週間の中で、数時間でも設けてほしいと話しています。市の教員は今約300人ほどですが、その内の40人が手を挙げ、ONE STEPpersという、自分たちが学んできた教育感を1回脇に置き、こどもを観察し、こどもに任せながら進めて行く授業をしようという取り組みを行っています。4月当初は13、14人ほどでしたが、現在は40人ほどに増えており、だんだん変化が伝わりつつあるのかなと思っていますので、先生たちの教育観も転換しながら取り組みを続けたいと思っています。何が言いたいかといえますと、現在学校はそういう状況下で、お声をいただければ寄り添う姿勢は学校も持ち合わせていると思いますので、お声を直接届けていただければと思います。	
7	10月31日(木) 上宮川文化センター	先日、学校業務サポーターの方が積立金を着服した件で説明会があり、2つの懸念を感じました。1つ目は、学校組織の問題です。300人もの職員がいる大規模な組織で、1人の個人の不正行為が可能だったことは、組織としての管理体制が甘かったのではないのでしょうか。一般企業で同じことをしようと思っても難しいと思いますし、学校のがバナンスが十分ではないと思います。2つ目は、資料の中で、地域全体で学校をサポートしましょうとありますが、やはり世の中一定数悪い人はいると思います。教師以外にも業務サポーターなど、こどもたちに関わる大人が増えてきている中で、悪意のある人物がこどもたちに近づく可能性も否定できず、多くの大人が関わることに不安に思う気持ちもあります。方針は理解できるものの、こどもたちの安全と安心を第一に考える必要があると思いますので、教育委員会でしっかり考えていただきたいと思います。	(教育長) 市の内部統制や体制については、再点検をさせていただきます。こどもたちには、年齢や枠組みを超えて、自分が知っている範囲以外の多くの人たちと出会ってほしいですね。ゲストティーチャーという手もありますが、学校からも、学校運営協議会などでアナウンスしながら進めていきたいと思います。協議会の委員は校長が推薦する仕組みですのでご安心いただければと思います。校長から「こういう人いませんか」と地域の方にお声かけしながら、授業いただいたり、活動していただいたりすることを考えています。	
8	10月31日(木) 上宮川文化センター	こどもの自発的な学習意欲を引き出すには、こどもが「なぜ学ぶのか」を理解することが重要だと感じています。親がこどもにどのような人になってほしいかを伝えたり、県や市がどれくらいのものをこどもに対して求めているかなど、事前にこどもに説明する必要があるのではないのでしょうか。例えば宿題とかも学ぶ意味が分かれば、もう少し続けてやってみようとなりますし、自発が身につくと、自分でどんどん先に行くことができます。また、芦屋は地域の方のレベルがとても高く、すごい職業に就いている親御さんも普通にいらっしゃいますので、そういう方とこどもたちを繋げてこどもたちの刺激になればと思います。	(教育長) おっしゃる通り、学習の意味というのはすごく大事です。いわゆるやらされている勉強から自らの学習へ段々と育っていくと「学び」という言葉が出てきたりします。幼少期の「遊び」が「学び」の基盤ですが、小学校に入ると一度区切られてしまうのが現状の教育システムの課題です。一斉型から、自分で選び目標に向かって学習を突き詰めていけるような教育が理想です。先生によっては、道徳の時間に、本質的なところをこどもたちと一緒に語り合い、こどもたちが自分ごととして考えていけるよう実践している先生もいますので、そういう人から広げてもらうということも大事にしています。一番肝心なのは、こどもたちが意味を考えずとも充実感を味わえるような楽しいものに出会うことです。自分らしさに行きついたり、いろんな人と出会って自分に返ってくことで「自分はこれでいいんだ」ということにも繋がっていきますので、そういう意味では自分の本質を問う機会はとても大事です。道徳や特別活動の時間に自分たちでやり取りし、時として大人もそこに入って行くような構想を持っています。	
9	10月31日(木) 上宮川文化センター	小学校の道徳の授業に参加させてもらったのですが、自分が学んだ時とは異なり、ジェンダーや平等の話をされていて、すごく衝撃を受けました。ついこどもに「○○らしくしなさい」と言ってしまうのですが、今の時代では言うてはダメなんだとのアップデートができていませんでした。こどもからは「ママの考え方を押し付けしないで」とか、「私にも意見がある」と言われたりすると、「普通はこうだよ」と被せて言うてしまっており、反省しました。勉強以外の道徳などは学校でしか学べません。親も今の時代の考え方を知りたいという気持ちがありますので、お便りなどでお知らせいただけたら嬉しく思います。	(市長・教育長) ありがとうございます。	

当日の主なやりとり				備考
		市民の発言	市長・教育長の発言	(補足説明など)
10	10月31日(木) 上宮川文化センター	高校受験に関して、芦屋と他市、市内でも学校によって格差があると感じています。兵庫県の高校入試は内申点が半分、当日のテストが半分の配点となっており、内申点が入試の結果に大きく影響します。また内申点は、5教科が5点満点にかける4されるのに対し、副教科はかける7.5と、5教科と副教科に大きな差があります。問題は、副教科の内申点の評価が主観的な部分が強いということです。例えば美術が得意で4や5が取れそうな生徒でも、先生との相性が悪いために3をつけられています。この問題に対して、市ができることとしては、外部の評価、つまり外部の模試の結果を成績に取り入れることはではないでしょうか。私立中学のお子さんは、外部模試を受け、自分の偏差値を把握しますが、公立ではそうした機会がありませんので、テストや授業態度など先生の評価に頼らざるを得ません。芦屋市はレベルが高いので、そういう市だからこその他の地域と格差があることを示すために、外部模試と学校のテストでの差を示すことができれば、内申制度の問題点を指摘する材料になるのではないのでしょうか。	(教育長) 外部模試は非常に難しく思っています。出題される問題にもよりますが、全国学力学習状況調査の問題などを見ますと、国語や数学などは教科横断型の問題になっています。また、正解も1つではありません。入試に関しては、どうしても点数を付けていく必要がありますので、そういう部分で難しいと思います。正解不正解だけでなく、表現に加点されたり、考えがここまで至ったというところに加点されたりというのも研究しているところです。先ほど美術の話がありましたが、美術も人によって絵を見た時の感じ方とかは違うはずですよね。感じ方が違うのに点数をつけないといけないというもどかしさや、その表現や感性を評価していく難しさも感じています。入試となれば、枠がありますので全員が希望する高校に行けず、例えば400人定員であれば401人目は落ちてしまうという線引きをしなければならないという点にもその難しさがあります。全員が同じ地域の中学校や高校に行くとなれば変わってくるかもしれませんが、もう少し先の話になるかと思います。	
11	10月31日(木) 上宮川文化センター	学校の設備で気になるのはトイレです。山手小学校なんかは設備が古く、こどもがトイレに入りにくいと、一日トイレを我慢して帰ってくることもあるそうです。2、3年前にNHKの番組で入りやすいトイレについて特集をしていました。そこで紹介されていたのは、下が乾式と言って、普通の学校のトイレとは違い、水を流せないタイプのトイレで、木のベンチなどが設置され、百貨店のパウダールームのようなイメージで、そこでちょっと喋れるようなものでした。イジメの場所にならないよう明るくして、トイレに面したテーブルもあり、そこでは出てきた子が喋っています。不登校の人もトイレが明るく皆で喋れる場所だったら来たいなと思います。明るくて皆が入りやすいトイレを整備していただければ、学校自体も明るくなるのではと思います。	(教育長) 設備の改修について、トイレリフォームは順番に行っていますので、必ず順番は回っては来ます。少し前には宮川小学校を改修していますし、山手小学校もそろそろ順番が回ってきます。トイレの環境については、市外へ視察するなど継続して研究しており、他市ではこどもの作品を壁に飾ったり、パネルの色を明るくしたり、照明をダウン系にするなどいろいろと工夫がされているようです。そういうヒントは、こどもたちに直接聞きながら、トイレが過ごしやすい場所になるよう、今風に色を変えたり照明を明るくしたりすることは試みたいと思います。	学校のトイレについては、順次、便器の洋式化、床の乾式化を進めているところです。清潔で使いやすく明るいトイレとなるよう、引き続き取り組みを進めてまいります。